

## 高松亨君を悼む

中 岡 哲 郎

高松亨君が逝った。

私の弟子といってよい彼は定期便のように数カ月に一回くらい私の家をたずねて、ひとしきり話をして、問いを投げかけ、それから京都の岩倉に住んでいるお母さんの所へ行った。今年（2017年）の正月、これから入院するといとまごいにやってきて、それから間もなく死んだ。

2年前の青葉の季節、ゆかりの人々を招いて京都で昼食を共にした。彼もやってきたが、その時、すでに発病していて、病院を抜け出して、来てくれたのだと後から知らされた。もともと細身な彼の異変には気付かなかった。

高松亨君は1983年に大阪大学大学院基礎工学研究科で化学工学の博士課程を終えた後、私が勤務していた大阪市立大学大学院経済学研究科に入学してきた。私の産業技術論の大学院ゼミには定年退職した企業技術者など、技術的経験を持ち寄って自分の仕事を広い視野で見直そうとする院生も多かったが、工学博士の課程を経て、さらに技術論・技術史へと研究領域を広げようとする彼のような若手はめずらしかった。

私は国際交流基金から派遣されたメキシコの大学院大学エル・コレヒオ・デ・メヒコから戻って、後発国の工業化を念頭に置きつつ、これまでの若手による研究実績を踏まえて、1985年5月から「両大戦間期の機械工業研究会」を立ち上げた。それに高松君も参加して、87年7月には「両大戦間期日本の機械貿易」というタイトルで報告している。ワープロが普及していなかった当時のレジュメを見ると、手書きの端正な文字が並び、たくさんの手書きの図もていねいに描かれている。この報告が彼の修士論文になるとともに、さらに台湾・韓国との比較がなされて、「中進国機械貿易の発展—日本と台湾・韓国との比較」として1990年に刊行された『技術形成の国際比較』に収められた。

次に彼といっしょにした仕事が、『大阪社会労働運動史』の執筆だった。私は昭和30年代を扱った第4巻から監修に加わり、大阪の産業と職場の動向について論じた部分を、1995年までの10年を扱った第8巻まで監修、執筆した。高松君には化学工業や繊維産業の動向や職場の変化を描き出してもらった。私が手を引いた第9巻は高松君らに企画と執筆を委ねた。

戦後衰退傾向をたどる三つの産業都市フィラデルフィア、マンチェスター、大阪の国際比較研究では、高松君が同じく私のゼミ生だった廣田義人君と組んで日立造船の事例を研究した。その成果を英語で論文にしたのは高松君で、Kenneth D. Warren and Toru Takamatsu, “A comparison of Cammel Laird and Hitachi Zosen as shipbuilders,” Douglas A.

Farnie et al. ed., *Region and strategy in Britain and Japan: business in Lancashire and Kansai, 1890-1990*, Routledge, 2000 となった。

私は1992年に大阪市立大学を退職し、大阪経済大学経営学部経営情報学科に転じ、産業技術史、研究開発管理論を担当した。高松君は94年に市大の経済政策論の後期課程を終えた後、いくつかの大学で非常勤講師を務めていた。しかし、年齢のせいか、なかなか常勤の職が見つからなかったことがずっと気がかりだった。97年に経営情報学科を経営情報学部に変更し同学部長として軌道に乗せる仕事を引き受ける過程で、96年に幸い高松君を後任の助教授として招くことができた。

この時期にはリーズ・V・ジェンキンズ『フィルムとカメラの世界史—技術革新と企業—』を高松君と共訳し、新エネルギー・産業技術総合開発機構からの受託研究「産業技術歴史継承調査」が元になった共同研究を継続して、その成果が『戦後日本の技術形成』として結実する。この本の中で、高松君はPAN系炭素繊維の開発過程を明らかにしている。

吉田光邦さんの死後、私が2代会長を務めた日本産業技術史学会で、高松君は長らく理事として事務局を担当していて、学会の発展に尽力してくれた。学会で『日本産業技術史事典』を編纂した時は、彼が化学関係の項目をほとんど手がけた。

高松君は常に水準の高い仕事を、しかも締め切りに遅れることなくしてくれたので、編集の立場からは安心して仕事をお願いできる、ありがたい存在だった。ただ、自分の研究を一冊の本にまとめられなかったのは心残りだったろう。これについては、何度か、勧めてみたのだが、逆に負担になっていたのかもしれない。

高松君は人当たりがよく、付き合いもよかったので、学生から最も人気のある教師の一人だった。常識的で、思いやりがあり、大学その他の所属組織のスタッフからも慕われていた。

私の退職後、高松君が経営情報学部長を2回、務めて、情報社会学部への改組に力を尽くしたと聞いている。大阪経済大学にとって、産業技術史研究において、そして何よりも学生にとって、高松君の早世は惜しまれることになった。